

## 平成30年度野幌自然環境モニタリング調査結果概要

### 1. 調査項目及び内容

調査項目	内 容
森林植生	再生活動地における天然更新及び植栽木の再生状況を把握。また、野幌自然休養林において良好であると考えられる林相を有する天然林（以下、「良好な自然林」とする）の概要を把握する。
菌類相	風倒被害地、良好な自然林、風倒被害を受けなかった森林において出現する木材腐朽菌の子実体を採取・同定し、森林の再生段階を菌類の面から検討を行う。
歩行性甲虫相	風倒被害地、林縁、林内において歩行性甲虫を捕獲し、得られる種から風倒被害地の再生段階を検討する。
野生動物相	自動撮影装置を用いた調査を実施し、森林の更新に影響を及ぼすと考えられるエゾシカ、特定外来種であるアライグマ、その他記録される野生動物から、野生動物相の健全性について評価を行う。

### 2. 調査結果

#### 1) 森林植生調査

2018年9月の台風被害でトドマツなど数種に被害が出たが、天然更新木は植栽列の内外で見られ、天然木の圧迫がみられ始めたが、植栽木は年々着実に伸長成長を増してきて、ササの稈高を抜きつつある。一方でツル類が樹木の生長を抑制している箇所が部分的に出てきた。ツル類をどのように処置するか考えていく必要がある。全体的に再生段階は第2段階と考えられる。



台風被害後45日林小班



広葉樹が定着している44日林小班

繁茂しているツル類はチシマザザも倒す46日林小班（同右）



#### 2) 菌類相調査

処理区では、植栽あるいは天然更新した樹種の倒木や枯死木から発生する菌類の増加がみられ、今年度の調査では計11種があらたに確認された。以上から再生段階としては、第2段階へ移行中と考えられる。

プロット毎の重要菌類出現頻度（2018）

和名	風倒被害処理区					天然林区					トドマツ人工林区				
	38へ処	38る処	41ほ2処	46に処	処計	37ほ天	38ろ天	49ろ01天	51ろ天	天計	34りトド	46にトド	道2トド	50りトド	トド計
ウスバシハイタケ											1	3		3	7
スエヒロタケ	1				1						1				1
カワラタケ															
トドマツガンシュビヨウキン															
レンガタケ		1			1										
アラゲカワラタケ															
モミサルノコシカケ											2	2	1	5	
サカズキカワラタケ						2	1	4	1	8					
キカイガラタケ															
キアシグロタケ															

\* 2018年秋期のトドマツ人工林区調査は風倒のため未実施

### 3) 歩行性甲虫相調査

ギャップ地の調査も2014年以降にCH指数が98を超える調査区が増え、2017年は平均で98.7に達した。本年度は、13箇所の調査地のうち10箇所で100に達したことは、天然林の組成にかなり近づてきており、群集構成が回復してきていると判断できるが、記録種数の減少は小休止の状況であり、一進一退しながら森林回復しつつあり、総合的にみて、再生段階は第2段階の後半に入っていると考えられる。



新たに確認された歩行性昆虫3種

- 左からチャバネヒラタゴミムシ(体長約8ミリ)
- ホソアトキリゴミムシ(体長約7ミリ)
- エゾマルクビゴミムシ(体長約11ミリ)

### 4) 野生動物相調査

確認種数と確認種構成については今年度、過年度で大きな違いは見られず、生息するほ乳類相に変化はない。エゾタヌキは、2014年依然と比べると撮影頻度の増加がみられ生息数が大きく増加していると推察される。特定外来種であるアライグマについては今年度も過年度同様、広範囲で多数が確認されたが、撮影頻度は減少した。在来種への影響などを引き続き注視する必要がある。

エゾシカは、9月調査で若干の増加が見られたが、引き続き低い撮影頻度で推移している。

図-1 CH指数(オサムシ・ゴモクムシ個体数比) = (森林環境を好むオサムシ亜科個体数) / ((森林環境を好むオサムシ亜科個体数) + (草原環境を好むゴモクムシ亜科のゴモクムシ個体数 + ゴミムシ個体数)) × 100]

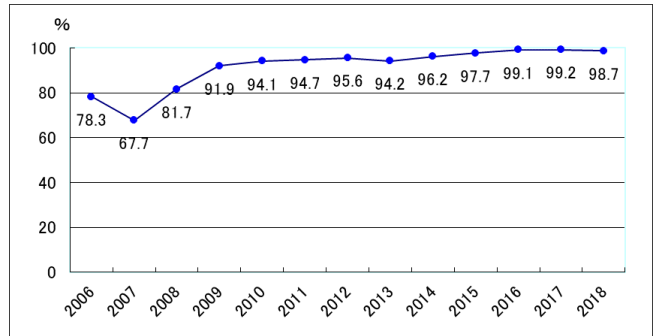


図-2 年別撮影頻度の推移



問い合わせ先：北海道森林管理局  
 石狩地域森林ふれあい推進センター  
 〒064-0809 札幌市中央区宮の森3条7丁目70番  
 TEL 011-622-5114  
 E-mail: h\_ishikari\_f@rinya.maff.go.jp